

特集にあたって

野々部 宏司（法政大学）

明けましておめでとうございます。2023年最初の特集では、「次のステージへ向けて—先導者からのメッセージ—」と題して、OR学会ならびにOR分野を牽引してこられた4名の先生方にご寄稿をお願いしました。いずれも昨年度定年退職をされた先生方で、いわゆる最終講義を誌面上で行っていただく企画になります¹。4名の先生方に執筆をお願いするにあたっては、これまでのご自身の研究内容や現在の状況などについて自由に執筆していただくことに加えて、後輩へのメッセージとして、OR学会やORに対する期待や希望にも言及していただくと嬉しい旨、お伝えしました。本特集では、これらのメッセージを受けて、学会の目指す未来について前向きに考える機会とすることも意図しています。そのような議論の場として、2022年11月に、会長・副会長による座談会を開催しました。本特集では、4名の先生方による記事に加えて、この座談会の様子を紹介する記事をお届けします。

最初の記事は、前会長の田口東先生（中央大学名誉教授、ベクトル総研顧問）による「リアルとモデル、データと計算」です。当時、メディアでも多数取り上げられました首都圏鉄道ネットワークに関する研究を含む交通モデルの話を中心に、通常は論文に記載しない内容も交えて執筆していただきました。モデルを単なるモデルとして終わらせることなく、実際に近い規模のデータを用いた計算を通して、現実の課題の解決に役立つ結果を得ることを重視されていることが窺えます。記事の最後には、「OR学会への思い」を述べていただきました。

次の記事は、水野眞治先生（東京工業大学名誉教授）による「OR研究に40年以上携わって—研究の変遷と将来への期待—」です。ご自身の研究テーマとしては線形計画問題に対する内点法や単体法を主としつつ、学生にはできるだけ自分で研究テーマを見つけるよう指導されていたことや、企業との共同研究を多数実施されるなど、実務や応用にも力を注がれていたことがわかります。また、偶然から生まれたほかの研究者と

の出会いや共同研究の機会を逃さず、自身の研究に生かすことの大切さが書かれており、このことは、特に若手研究者にとって大いに参考になると感じます。

3本目の記事は、池上敦子先生（成蹊大学名誉教授）による「問題解決における最適解」です。池上先生といえばナーススケジューリングの研究が有名で、記事でもナーススケジューリングが題材として用いられています。記事ではより一般的に、意思決定プロセスにおける「広い意味での最適化」について述べられており、人の主観を無視することのできない実問題に最適化技術を適用する際のヒントになります。また、ご自身が研究が大好きで、現在も楽しんで研究を進められている様子が記事から伝わってきます。

誌上最終講義の最後の記事は、大西匡光先生（大和大学、大阪大学名誉教授）による「オペレーションズ・リサーチの確率モデルと金融工学についての随想」です。研究の対象を、確率モデルを軸にしなが、ご自身の所属や学生の興味、あるいは時代の変化に応じて、信頼性・安全性から待ち行列、ゲーム理論、そしてファイナンス・金融工学へと移して（拡げて）こられた経緯がよくわかります。また、それぞれの研究分野で色々な研究集会や勉強会などに積極的に参加し、人的繋がり・研究交流を大切にされたことが読み取れます。

「座談会—会長・副会長に聞く—」と題する記事では、2022年11月に開催した座談会での議論をお伝えします。山上伸会長、田村明久副会長、山田昭雄副会長、猿渡康文副会長に、鳥海重喜理事、鶴飼孝盛理事にもオブザーバーとして加わっていただき、OR学会が一つの「コミュニティ」として活性化し、存在意義を高めていくために、学会がどのような未来を目指し、学会が次のステージへ向けて何をすべきかについて語っていただいています。

最後に、本特集にご協力いただきました執筆者の先生方、関係者の皆様には感謝申し上げます。読者の皆様には、新年の明るい気持ちで本特集を楽しんでいただければ幸いです。

¹「誌上最終講義」の発案は田中未来先生（統計数理研究所、本学会広報委員）によるものです。